福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

「知の創造の場」としての大学共通教育の授業にむけて：『消費社会と私』の授業実践を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 淑子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8935

「知の創造の場」としての大学共通教育の授業にむけて
～『消費社会と私』の授業実践を事例として～

松田　淑子
（教育地域科学部生活科学教育講座）

１．　緒言

現代社会は、生産と消費をベースとした経済最優先の時代から、人が模索し協働しながら新しい知を生み出すことに価値が置かれる「知識基盤社会」へと移行してきている。

このような時代、大学教育はどのようにあるべきか。本年３月 26 日には、中央教育審議会大学分科会大学教育部会より、「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」の審議まとめが公開された。その他各種部会から挙げられた審議内容も受け、6 月 4 日には平野博文文部科学大臣より「社会の期待に応える教育改革の推進」が発表された。翌５日には文部科学省より「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」が公開され、大学改革の全貌や方向性が明白に打ち出された。まさに今、戦後教育改革以来の抜本的な教育改革の波が訪れている。

上述した文科省プランでは、大学関係者らに対し「社会の変革を担う人材の育成、『知の拠点』として世界的な研究成果やイノベーションの創出など重大な責務を有しているとの認識の下に、国民や社会の期待に応える大学改革」を実行することを求め、その成果として、「社会を変革するエンジンとしての大学の役割が国民に実感できることを目指して」取り組むよう明示している。もちろん、国の打ち出した方向性だから正しく、それを無批判に受け入れることを国立大学のミッションとすることは一方で危険であるが、現在の日本、世界の状況や、目の前の学生たち、その背後にある小・中・高等学校の教育の現状を鑑みれば、社会の変革が必要であること、その大きな一角を大学教育が担うべきであることは実感せざるを得ない。今後、国の求めに応える形で様々な大きな改革が繰り広げられるであろう。しかしながら、本来、その問題意識は既に大学関係者の中にこそ先にあるべきものである。

本論は、大学教育に携わる者の一人として、まず足元の大学の授業改革について授業実践事例をもとに考察、提案するものである。

現代のように複雑化した世界において、その在り様を変革することは容易いことではない。当然きれいな「正解」など存在するはずのない中で、学生たちにつけるべき力とは何であろうか。社会の進展とともに爆発的に膨れ上がる知識を得ることは必要不可欠であり知識技術の習得をないがしろにすることはできない。しかし同時に、知識技術の習得を目的化した教育の限界はすでに誰の目にも明らかである。文科省は前述のプランの中で、社会が求める人材像を「主体的に学び考え、どんな状況にも対応できる多様な人材」とし、「学生の主体的な学びの確立」を大学教育に求めている。そしてそのためには、大学教育の質的転換、「教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生が相互に刺激を与えながら知的に成長する課題解決型の能動的学修を中心とした教育へと転

換する」ことの必要性を謳っている。筆者はこの方向性に賛同しており、すでに以前より、前任校の高校現場でも、現任校の大学現場、特に大学院の少人数ゼミにおいてそのような教育の在り方を試みてきた。そして、教師も生徒、学生も共有する切実な問題、唯一の「正解」などない問題に対し、ともに向き合い、学び合い、意見を高め導き出す営みとしての授業を、「知の創造の場」と位置付け価値をおいてきた(1)。冒頭に述べたように、「人が模索し協働しながら新しい知を生み出すことに価値が置かれる『知識基盤社会』へと移行してきている」現代社会において、生徒たち、学生たちが、新しい知を創り出す場としての授業を経験することは、「知識基盤社会」を体感・認識し、自らもその社会の主体的担い手であることを自覚化する意味でも重要なことであろう。

本論では、1991 年の大学設置基準大綱化以降、その低迷が著しい教養教育を授業の対象としている。2010 年の日本学術会議による提言「21 世紀の教養と教養教育」でも示されたように、「21 世紀の世界に教養教育の展望を拓くために、人間、自然および社会に関わって人類が共有しなければならない『知』」の模索と創造は現代社会の課題である。本授業実践は、そのような現代に即した教養教育の一事例でもある。

「知の創造の場」としての共通教育の授業実践例を提示し考察することを通して、その価値の確認と授業の意味について提案したい。

２．　授業実践の様子と考察

(1)　本授業の位置付け及び受講生等の内訳

本論で追究する「知の創造の場としての大学共通教育の授業」実践事例として、『消費社会と私』の授業を用いる。本授業は、本学 2011 年度後期の共通教育 A 群共通教養 1 分野（社会）「生活と生活空間の科学」系に属する授業である。授業者は 1 名（筆者）であり、部分的にゲストティーチャー 2 名が参加した。

受講生は 19 名。男女比は男性 14 名、女性 5 名であった。うち 2 名は市民開放講座受講の一般の方である。17 名の学生の内訳は、4 年生 1 名、3 年生 1 名、2 年生 7 名、1 年生 7 名、留学生 1 名であった。16 名の本学学部生の内訳は、教育地域科学部 2 名、工学部 14 名であった。受講生らは、本授業履修を通じて初めて知り合った者同士である。なお、上記受講生の内訳からは、登録は行ったが全くもしくはほとんど出席せずに単位認定対象とならなかった者は除いている。

(2)　授業テーマに関して

「知の創造の場としての授業」を展開する上で、その授業テーマは非常に重要である。『消費社会と私』の授業テーマについて、そのテーマ選定の理由を以下に示す。

「消費社会」の土台に位置する資本主義社会とは、モノ（商品）とヒト（労働力）が自由に売買される社会であり、売買の場である「市場」によって「生産」と「消費」が分断された社会とも言える。そしてその進展とともに、重心は「生産」から「消費」へと移行し、「消費社会」を形成するようになった。

ジャン・ボードリヤールは、その著『消費社会の神話と構造』(2)で、「消費社会」においてはモノはその本来の使用目的のみならず「記号」的な意味合いを持ち得ていることを明らかにした。すなわち、「消費社会」とは、モノがその使用価値を超え、消費者の社会的権威の誇示、つまり他者との差異を示す優位的欲求の象徴となっている社会である、と定義したのである。

一方、そのような「消費資本主義」化が進展した社会への警鐘として、宇沢弘文は、『社会的共通資本』(3)において、自然環境や社会的インフラストラクチャー、及び、教育や医療といった制度資本などの「社会的共通資本」の管理・運営まで、市場消費的基準に従っていてよいのかという問いを投げかけている。宇沢の指摘のみならず、昨今の資本主義経済の行き詰まりや地球環境の問題は、「消費資本主義社会」の限界と、それを超えた未来社会のデザインの必要性を示して

いる。

このように、現代人にとって「消費」とは、自分自身の内面とこの社会や他者とのかかわりを見つめる上でも、主体的に近未来社会をデザインする上でも、非常に重要なキーワードである。現代人の歴史的立ち位置の確認と自覚に基づき、この「消費社会」を相対化した上で、未来の自分と社会、「消費資本主義社会」を超えた「ポスト消費社会」を消費者として主体的にデザインできる、そのような可能性を持ったテーマだと言える。

本テーマ『消費社会と私』は、社会や環境の現状や課題を認識し、学生自らが、探究的に、協働的にその解決を模索し実行への一歩を踏み出すための学び合いのできる、つまり「知の創造の場としての授業」を実現し得るテーマとしてふさわしいものと思われる。

（3）　授業展開

1）　授業の全体像

全 15 回の講義は、以下のように展開した。第 1 回から第 6 回までの前半は、主として「資本主義社会」「消費社会」についての基礎的理解を深める授業であった。但し、講義形式の部分は最小にとどめ、学習ゲームなども取り入れながら実践的に理解できるようにした。また、前半の授業の中で、ペア学習やグループ学習を盛り込み、毎回の授業の最後に意見・感想等を書かせたものを次回授業で活字化し全学生にフィードバックするなど、協働的な学びの基礎も培ってきた。

その後第 7 回から第 14 回までの後半の授業では、ある想定された話に基づくプロジェクト学習を行い、最終授業では、全体の総括を行った。本論で示すのは、主として後半のプロジェクト型の授業の部分である。

【第 1 回】オリエンテーション及びプレテストの実施
【第 2 回】資本制の成り立ちについて及びペアで売買体験ゲーム
【第 3 回】貿易ゲーム
【第 4 回】貿易ゲームの振り返りと消費社会について①（消費社会とは）
【第 5 回】消費社会について②（消費社会と子ども）
【第 6 回】消費者教育と消費者市民社会
【第 7 回】今後のプロジェクト学習の課題提示とグループ決定、グループミーティング
【第 8 回】グループ別調査活動と打ち合わせ①
【第 9 回】グループ別調査活動と打ち合わせ②
【第 10 回】模擬会議①（中間報告会）
【第 11 回】グループ別調査活動と打ち合わせ③
【第 12 回】グループ別調査活動と打ち合わせ④
【第 13 回】グループ別調査活動と打ち合わせ⑤（主として発表準備）
【第 14 回】模擬会議②（最終報告会：各班のプレゼンテーションと全体会議）
【第 15 回】授業全体の総括

2）　プロジェクト学習の課題

第 7 回の講義では、はじめに、以下の課題を提示し、補足説明を行った。

＊　学習課題

1992 年の地球サミット（リオデジャネイロ）で、セヴァン＝スズキという 12 歳の少女が別紙（本論では省略）のようなスピーチを行いました。また、この地球サミットで採択された「アジェンダ 21」では、自然環境を尊重し育むような開発を追求する上で、教育が果たす役割がとても

高いことも示されていました。そしてその10年後の2002年、ヨハネスブルグにおいて開催されたサミット（第2回地球サミットとも呼ばれています）において、日本が提出した決議案、「国連持続可能な開発のための教育の10年」（United Nations Decade of Education for Sustainable Development）（2005～2014年）が採択されました。その最終年の2014年、UNESCO国際会議が日本（名古屋・岡山）で開催されます。

以上の経緯（ここまでのことは事実です）をもとに、以下のような近未来の【想定】をしました。

2014年、UNESCO国際会議が日本で開催されました。その会議に、リオデジャネイロにおける、セヴァン＝スズキの再来のように、ある少女がスピーチを行い、各国首脳陣に向けて次のような提案をしました。

「世界の穀物の全生産量は約22億トン（2005年国連食糧農業機関の概算）です。地球の人口は約65億人です。だから、１年間に１人が約340ｋｇの穀物を食べることができます。それは、1日１人当たり約2000ｋcalの充分なエネルギーにあたります。でも、現実に発展途上国の人を中心に、約8億5千万人の人が常に飢えて苦しんでいます。食べものだけでなく、水も不足しています（＊注1）。

私は、なぜそのようなことが起こるのかを学校の授業で調べたり考えたりしました。調べてみると色んなことが分かりました。例えば、2007年には１億トンの穀物がバイオ燃料をつくるために使われました。世界の商業用大豆の収穫量の約80%と、世界の穀物の収穫量と商業漁獲量の約3分の1が家畜の飼料になっていることもわかりました。牛肉1kgのために、15,000ℓの水が必要なこともわかりました。だから発展途上国の人々は飢え乾いているのです。それとは正反対に、ほとんどの人が肉や卵、ミルクを食べたり飲んだりしている先進国では、肥満や肥満が原因の糖尿病や心臓病で苦しんでいる人が沢山いることもわかりました。2005年の統計ではアメリカ人の約40%が肥満でした。（事例は『食料の世界地図』第２版　丸善株式会社　より引用。）

こんなことはとてもおかしなことだと思います。よくないことだと思います。だから、私は、世界中のみんなが、肉を食べるのをやめるという約束をして欲しいと思います。穀物を燃料にすることもやめてください。そうすれば、飢える人も肥満の人もいなくなるのです。世界中のみんなが幸せになります。なぜ大人たちがこんな簡単なことに気付かないのか不思議です。」

このスピーチを受けて、各国首脳は、彼女の提案に対し国としてどのような回答をするかを持ち帰って検討することになりました。

日本でも、どのような合意をし、回答するのか、早急に決定しなければならなくなりました。

さて、まずあなた自身はどう回答しますか？そして、日本は、世界はどうすればよいと思いますか？ここでは、「日本はどうすればよいか」という観点で議論を展開していきましょう。

＊　注１：バーチャル・ウォーターについての補足説明

バーチャル・ウォーターとは、食料を輸入している国（消費国）において、もしその輸入食料を生産するとしたら、どの程度の水が必要かを推定したものであり、ロンドン大学東洋アフリカ学科名誉教授のアンソニー・アラン氏がはじめて紹介した概念です。（日本では、東京大学の沖大幹が第一人者）

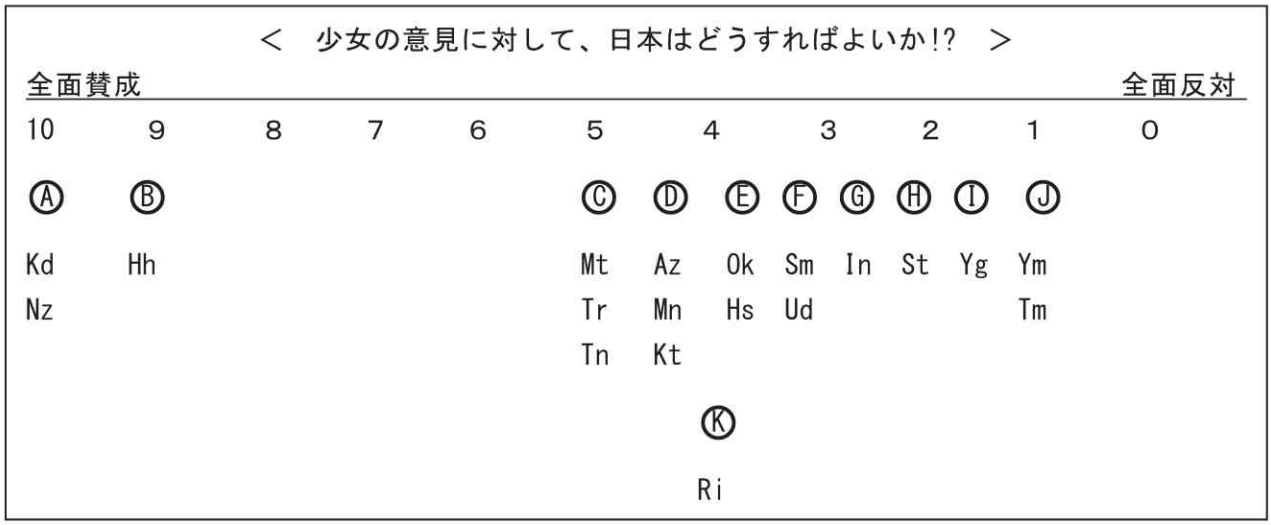
例えば、1kgのトウモロコシを生産するには、灌漑用水として1,800リットルの水が必要です。また、牛はこうした穀物を大量に消費しながら育つため、牛肉1kgを生産するには、その約20,000倍もの水が必要です。つまり、日本は海外から食料を輸入することによって、その生産に必要な分だけ自国の水を使わないで済んでいるのです。言い換えれば、食料の輸入は、形を変えて水を輸入していることと考えることができます。

３）プロジェクト学習の展開

①　受講生のはじめの意見とグループ分け

学習課題提示後、「日本はどうすればよいか」という問いに対し、彼女の提案に全面賛成を 10 点、全面反対を０点として、段階的に自身の価値を数値化し黒板上に示させた。この数字自身は主観的なものであり、例えば同じ５点をつけたからといって、その価値観や思いが同じわけではない。しかし、クラスの全体像を概観し、自分の意見を相対化するには有効と考えた。また、似通った点数の者同士でグループ（一人も可）結成を行った。意見表明後、微調整は可能とした。各グループはそれぞれ一つの「政党」だと仮定した。

黒板に示された受講生たちの意思表示と 11 グループ（A～K）の結成状況を以下に示す。



＊　留学生の Ri と授業者の相談により、Ri のみ「日本はどうすればよいか」を「（母国）中国はどうすればよいか」に変更して考えることにした。そのことに関して、他の受講生にも了承を得た。

【図 1】　少女の意見に対する賛否と 11 グループ（A～K）の結成状況

上記の通り、A・B グループとなった 3 名を除き、ほとんどの意見は中間辺りから「反対」にかけて集中した。グループは点数に応じて１～３名で結成した。

その後、第７回の残りの時間と第８・９回の講義時間のほとんどをグループ学習とした。はじめに各グループ内で各人の意見を表明し合い、グループ内の意思疎通をとるよう指示した。そして、自分たちの意見の根拠や正当性を表明できるよう、インターネットや図書館の書籍を利用して調査し、中間報告会に向けてグループの主張をまとめるよう促した。

②　中間報告会での主張と展開

第 10 回の講義時、中間報告会における各グループの主張の骨子は表 1 の通りであった。発表は表に示した順（反対の強いグループから）で行った。各グループの発表ごとに言葉の意味などシンプルな質疑応答のみを行い、全グループ終了後にまとめて質疑応答や議論の時間を設けた。それらを踏まえて、ゲストティーチャーの島田広氏に感想と今後の活動に向けた助言を頂いた。

＊　島田氏は、日本弁護士連合会消費者対策問題委員会副委員長で消費者教育ネットワーク部会部会長を務める弁護士である。2009 年には「消費者市民社会」先進国ともいえるノルウェーを訪問、その成果のもとに「消費者市民社会」とその教育の構築に努めている。

【表１】　中間報告会での各グループの主張内容

班	主　張	理　　由	代　替　案
J	全面反対	・肉を食べるのをやめるのは現実的ではないから。 ・味を知ってしまっている者は戻れないし、栄養的にもよくないから。	・肥満の人からお金を徴収し、飢餓の国に回す。
H	ほぼ反対	・食料に関する産業の衰退はよくないから。 ・肉食文化の尊重の観点から。 ・ただ肉食をやめるだけでは皆が何も考えなくなるから。	
G	反対	・肉の輸入国である日本が肉食をやめることで、飢えた人々の食料問題解決にはつながらないから。	
F	ほぼ反対	・助けたい気持ちはわかるが、非現実的な提案だから。(先進国では肉にかかわる産業が衰退し、発展途上国内でも食料がいきわたるとは考えられない。)	・バイオ燃料をやめる。 ・農業技術の支援をする。 ・肉類の生産を制限する。
E	反対	・肉食をやめるのは心身の健康に悪いのでよくないから。	・企業や消費者の出した廃棄物に税金をかけ、そのお金を食糧支援に回す。(優良企業には賞金も)
D	反対	・飢餓問題の根本は政治問題だから。 ・食文化が衰退するから。	・農業技術の支援をする。 ・政治の支援をする。
C	少し賛成		・魚中心の食生活へ。(教育や広報活動で啓蒙。)
B	反対だが問題意識は同じ。	・飢餓問題の根本は分配の問題だから。	・世界中で、余分な食料輸入を出来ないように取り決める。
A	賛成	・皆が健康になる方法だから。 ・美味しいから、お金があるから、ということは理由にはならないと思うから。	・豚等飼料をかけずに育てられるもののみ食用とする。
K	ほぼ反対	・問題の根本は貧しさ。お金がないから飢える。	・経済発展のための支援をする。

＊ Ｉグループ（Yg）は欠席。　　＊下線は筆者による。

中間報告会は、反対意見の強いグループから発表した。前半、多くのグループの主張は、その理由は異なるとはいえ、少女の示した解決方法である肉食を止めることについての反対意見が中心となった。調査期間が短かったにもかかわらず代替案を提示するグループも複数あった。

発表の後半、D グループや B グループは、少女の真の問題意識である飢餓の根本的原因に言及した。つまり、D・B グループは、少女の主張を方法と目的とに分けて考える必要があること、

肉食全廃という方法についての議論にのみとらわれるのではなく、飢餓で苦しむ人を助けたいという少女の根本的願いである目的を実現するために、飢餓の原因を追究し、それをどのように解決したらよいかということを考えるという発想で意見を述べた。

また、全グループ発表終了後、全体での質疑応答や議論の時には、以下のことが指摘され、今後全体でも共有すべき重要な視点となった。（ア）はAz、（イ）はKtからと、共にDグループのメンバーから指摘された意見であった。

（ア）先進国の人の良好な健康状態の維持と、飢餓で死んでいく人の問題を同等に考えられるか？
（イ）Jグループから、「肥満の人からお金を徴収し、飢餓の国に回す」という代替案が提示されたが、そもそもこの問題は「肥満の人」などの個人攻撃で解決できるのか？一方で、肥満の原因はファーストフード問題とも言われており、実は先進国の内部にも格差の問題があり複雑だと聞いたことがある。
（ウ）少女は肉食云々ということより、世界中の皆が食料問題に対する意識をもち、考える必要があるということを訴えているのではないか。そのためにはどうしたらよいのだろう？

後半の発表から質疑応答・議論における展開は、本授業にとって大きな転換点であった。受講生たちは、何を10～0のものさしとすべきなのか、何のためにこの想定文に基づく学習をしているのか、自分たちは何を考えるべきなのかなど、答えを導き出すこと以上に問いそのものの意味を皆で考え合うことの重要性を感じとることができたと思われる。

中間報告会を経ての一言コメント欄には、「この問題には様々な問題が絡んでいることが改めて分かった。まだ自分の班は色々と調べが足りないと思った。」（Aグループ Kd）「自分たちのグループの考えが甘いなあということをひしひしと感じます。完璧な解決策なんてものはないと思いますが、こうやって意見をつきあわせたりして、考えていかねければと思います。」（Cグループ Tn）「いろいろな意見が出たので、パクリになるかもしれないが取り入れていきたい。」（Dグループ Kt)などの記載があった。

中間発表会とは、単にそれぞれのグループの進捗状況を披露し合うだけの時間ではなく、問いの意味そのものを掘り下げ、確認し合い、協働の場であることを自覚化できる時間なのである。

一方、ゲストティーチャーの島田広先生からは、この中間報告会での議論に対し高い評価を頂くと同時に、これからのグループ活動にあたって、追加して考えるべき視点について助言頂いた。

イ）自分の食生活が大きな力につながる。持続可能な生産の流れをつくるために消費者が世界に与える影響の大きさについても考えて欲しい。
ロ）商品の終着点、お金の出発点、ゴミの出発点に着目してみて欲しい。
ハ）今の先進国のライフスタイルはこの先も続けていくことができるのだろうかと一人ひとりが考えて欲しい。制度や経済の問題は大きいけれど、国や世界を動かすのは誰なのか、誰が国や世界を動かすのか考えてみて欲しい。

③　中間報告会後の展開

中間報告後、翌週の授業では、表1や島田氏の助言を提示し全体で中間報告会を振り返った。この授業も含め最終報告会に向けたグループ活動や授業者とのミーティングなどの授業を3回もった。

その間、授業者に対し、BグループのHhから島田氏のイ）やハ）の助言の意味について詳しく教えて欲しいとの依頼があった。そこで、授業者からチョコレートを例に以下のように説明し

た。説明の途中からDグループもその中に加わり話を聞いた。

先進国の人々が低価格で食べることのできるチョコレート、その原料であるカカオの収穫は現地の労働者（児童労働も含む）たちの過酷な労働と低賃金によって成り立っている。そのような現実に対し、先進国の中からも異議を唱える動きとしてフェアトレードなどがある。（フェアトレードとはその名の通り適正な価格による貿易であり、国の格差に基づく買いたたき、それによる不当な労働をさせない一方、高品質の商品を提供してもらうという関係性を継続的に保つものである。）フェアトレードのチョコレートは一般のチョコレートの価格に比べ高くなるが、カカオの収穫に児童労働は使わない、農薬等は最小限にとどめるなどその背景は一般のチョコレートと大きく異なっている。

私たち先進国に暮らす者にとって、商品の購入は各自の判断に委ねられている。つまり、どのチョコレートを購入するかは自由選択である。逆に言えば、消費者として購入するものにはその人の価値が表れるということでもある。さらに言えば、商品購入の背後にはどのような社会を望むのかという主張までも組み込まれるのである。つまり、現代の消費資本社会における購入・消費行動とは実は選挙で一票を投じることと同等とも言える。

また、JグループのTmは授業者に対し、以下のような話をした。

中間報告会で、このテーマは表面上のことを言っているのではないことが明らかになった。格差是認なのか地球全体で持続可能性に向かう方向転換をするかということなのだと思う。

実は自分は高校時代、「世界が一つになればいい」と真剣に考えていた。「現在、世界の何%の人が飢えている。それを救おうとするとまた新たな人に害が行くので、数%の犠牲は結局仕方がないことなのだ。」という発想ではだめだと思う。8億5千万人の人一人ひとりが今飢えているのだという現実を何とかしたい。でもどうすればよいのか本当にわからない。

ただ、こんなことを授業で言えるのは初めてだ。

その他、HグループのStは授業者に対し、「中間報告会では主張しきれず後悔した。自分がサークルで行っている活動なども含めてしっかり主張したい。」と述べた。また、一般受講生のAグループNzさんはかなり高齢の方であり、自分の価値観や感覚が若い人とは随分異なるからと遠慮されていた。最終報告会では是非主張して欲しいと授業者より依頼した。

④ 最終報告会での主張と展開

最終報告会では、くじ引きで決めた順番で各グループのプレゼンテーション（５～７分）を行なった後、全体での討論やゲストティーチャー（中間報告会にも参加の島田広弁護士、島田氏の同僚の神保美智子氏）からの講評を頂いた。

各グループの主張の要旨を表２に示した。発表順の通り示してある。

【表 2】　最終報告会での各グループの主張内容など

E	**少女の意見には反対。** 我々は肉をしっかり食べるべきである。 餓死者を救うという問題解決のために、先進国での失業者（肉の生産や流通にかかわる人）の増加など新たな問題を起こすのはよくない。 知らない遠くの人々のことよりも身近な人のことの方が大切なのは当たり前である。 そして、自分たちの人生の「質」を落としたくない。

	しかし何より大切なのは、この問題を色んな人に真剣に考えてもらうことである。そのために例えば、食料廃棄物に税金をかけ業者や客に請求する、などの政策をとり、皆に考えるきっかけをもたらしたい。
J	**少女の提案した「方法」については現実的ではないので反対だが、発展途上国に支援することには賛成。** 代替案は、デンマークのように脂肪分の多い乳製品や肉類に税金を課すことと、肉の生産量を制限すること。 但し、これらを日本だけでするのではなく、世界的に先進国が分担して支援することを取り決める。
A	**少女の意見にかなり賛成。** 肉の中でも特に飼料として最も多くの穀物を必要とする牛の肉の輸入は止める。その程度なら栄養的にも代替可能。 それでも起こり得る問題を防ぐため、食に関する教育の徹底（牛肉を止める理由を考える。食べ物を無駄にしない。）や失職対策・支援を行う。 自分たちだけが美味しいものを食べ、地球環境や飢えた人はどうでもよいとは思えない。少し私たちが我慢すればいい。 日本は、老人力等を活用して食料自給率をあげ、輸入を減らすべき。
D	**「肉を食べない」という少女の「方法」には反対。** 肉と言っても、かかる飼料は牛＞豚＞鶏・・・一律には扱えない。 お金の支援では、政府にとられかねないので、代替案として、発展途上国の食料が安定するよう農業支援を行う。日本も食料輸入を減らすようにする。（太っている人ではなく）儲けている企業から税金を多く徴収して途上国支援に回す。
F	**自分たちの生活水準が変わるような少女の意見には反対。** バイオ燃料に使われている穀物量は極力減らし、肉の生産に上限を設ければ、計算上、少女が言うほど極端にしなくても（1 割程度削減で）大丈夫。
H	**少女の主張そのものは賛成だが、「方法」には反対。** 重要なことは、食べ物の背景（この食材は誰がどうやって作ったのか。毎日食べ物があることは当たり前のことじゃない。）であり、自分の生活が如何にして成り立っているかということを意識すること。 そのために、例えば TFT(Table For Two：先進国の私たちと発展途上国の子どもたちが時間と空間を超え食事を分かち合うというコンセプト。対象となる定食や食品を購入すると、TFT を通じて 20 円が発展途上国の 1 食分の給食費として寄付される。）のなどへの取り組みを増やしていく。 食文化の存続と言うことでは、「肉食禁止」には違和感がある。
K	**経済成長期にある中国では、今、肉食禁止は無理である。しかし、少女の気持ちはよくわかるし無視したくはない。** 中国の現状から、問題視されるのはレストランなどで捨てられている大量の食べ物である。そのような食べ物を出した企業に対して「浪費税」を作りそのお金で支援。 税金によって富裕層から貧困層へお金が回るようにしたい。（税をかけることで捨てる量が減ることにも期待したい。 経済の流れを止めるのではなく変えることで解決に近付けたい。

B	**少女の意見に賛成。肉の消費量をゆっくり減らしていきたい。** 少女の指摘通り、同じ地球で飢えた人と食べ過ぎで困っている人がいるのはおかしい。そして、発展途上国が飢えているにもかかわらず、先進国がよりよい食の質と量を求め続ける現状はおかしい。 しかし、それは国の政策では変わらなかった。それでも今、社会を根本から変えていく必要がある。そして変えるにはとても大きな力が必要だ。 その大きな力に「消費者」がなれるように、「消費者」に対し意識を変えるような広告活動や教育を行うべき。「飢餓に苦しむ人がいる」という実態をもっと広く世間に浸透させて、「消費者」としての行動によって世界を変えていきたい。
C	**少女の極端な「方法」には反対だが、主張そのものは重要なこと。まず飢餓へと国内外の目を向けさせることが大切。** そのために、まず先進国日本が自ら肉の輸入を１割削減する。それにより外国に対してアピールできるし、国内でも議論の種となる。議論の広がりは、国民の目を飢餓国に向けさせることにつながる。
意見交換	＊ これまでの議論の中では出てこなかったことだが、単なる「食べ物」「消費の対象」としてだけで生物の「生命」を捉えてよいのか？そのような視点もあってよいのではないか。(H グループより) ＊ 自分たちのグループの意見は、他のグループとはかなり異なるものであった。しかし、社会の中では、遠い国の大きな苦しみより身近な人の小さな苦しみの方が重いのは「現実」ではないのか。(E グループより)
ゲストティーチャーの講評	問題文の意味の深さを感じたし、それに対する皆の意見一つ一つも深く素晴らしかった。生活の中で見過ごされていくことを見ようとし、取り組むことの価値は大きい。 授業後、これからあなたはどうしていくのか!?是非、何か一歩踏み出して欲しい。例えば、ツイッターでつぶやく、友人に伝えるなど、この授業を受けていない誰かに対して、発信者となることでも踏み出すことはできる。小さな発信と行動の積み重ねが世界を動かす。 また、この問題は世界経済の流れにも大きく影響してきているのだから、将来的に企業人としても踏み出して欲しいが、何より既に消費者であり、消費者（消費者市民）として、次代を創っていくことができる。

＊ I グループ（Yg）・G グループ（In）は欠席。　　＊ 下線は筆者による。

中間報告会での議論を受け、少女の「肉食禁止」という「方法」に対しては反対であるが、主張そのものや気持ちには賛同するという意見が多く見られた（グループ J・D・H・K・C)。特に、前述したように、中間報告会で主張しきれなかったことを後悔していた H グループ St の発表は、「食べ物の背景」に目を向けることの重要性を力説し、TFT という具体策も挙げた説得力のあるものであった。また、当初より少女の意見に賛成であった B グループの Hh は、ゲストティーチャーの島田氏の助言内容に強くひかれた。そして消費者市民を育てる教育に期待し、政治が変えられなかったこの世界を消費者が変える、つまり消費者市民社会の構築を目指すという主張をした。Hh は、島田氏からの学びをもとに自分の主張を確かなものとして創造し、発信することによって、他のグループに衝撃を与えた。

B グループ同様、当初より少女の意見に賛成だったが世代の違いから遠慮して発言を控えていた A グループ Nz さんは、同グループの Kd の発表の後ご自身で「自分たちだけが美味しいものを食べ、地球環境や飢えた人はどうでもよいとは思えない。少し私たちが我慢すればいい。そし

て、日本は、老人力等を活用して食料自給率をあげ、輸入を減らすべき。」との主張をされた。Nz さんの発言に対して、D グループの Kt は、第 15 回に提出した『本授業全体を振り返って』に以下のように記述している。

この授業は同じテーマで話し合い、プレゼンするので、新しい考えが出てきました。私の思った新しい考えとは、“我慢する”ということです。私のグループの意見はどちらかというと“我慢しない”方向でした。しかし、Nz さんが、「私たちが我慢すればいいんじゃないのか？」と言っていて、身近でそんな事を言う人が少なかったので、「あぁそうかもなぁ」と思いました。お金でなんとでもなる時代なので、本当に人のことを思いやって考えるって大切なのかもしれないと思えるようになりました。

生きた時代によって価値観の異なる方との学び合いが、新しい世代の価値観を揺さぶり、新たな知を創造していくための礎を築いたのであろう。

本時は、集合時刻を早めて開始したが、それでも時間不足で、最後の討論は意見交換にとどまってしまった。また、授業後の感想の記述にもほとんど時間をとれず、非常に残念であった。その中で、最終的に他のグループと最も異なる主張となり、意見交換の際も再提案した E グループの Ok は以下のような記述をしている。

議論できなかったのがすごく残念でならない。（中略）自分の予想を超えた反論を聞いてみたかった。しかし、いろんな人の考えを発表を通して知れたのが良かった。何が正しいとか間違っているとかそんなことはどうでも良くて、こういった発表を通して、いろんな考えを知ること、そして、それについて考えることが大切であり、僕自身も今回の問題についていろんな人の、意見を知ったので、今後も考えていきたい。

Ok の指摘は、異質な意見からの学びの重要性である。Ok の指摘通り、新しい知の創造とは、異質のぶつかり合いの中で生まれてくるものであろう。

前述したように、H グループで留学生の Ri は、一人だけ中国のことを検討してきたのだが、母国の実態を冷静に考察した上で提案した「浪費税」や、「経済の流れを止めるのではなく変えることで解決に近付けたい」という発想は、他の受講生から「流石」との評価を得た。以下に示したように、Ri 自身も『最終報告・討論を経て』において、異なる国について検討してきた他のグループの意見と自分の意見をあわせて考えるとともに、このような教育が国を超えて重要であることを提案している。Ri の指摘も Ok 同様、異なる視点が新しい知を創り上げていくことを証明している。さらに、Ri はそういう場をもっと広げることも提案している。

他のグループの提案でも、私の提案した浪費を防止することができると思います。そして、食教育はどの国にとっても必要と思います。皆さんからいい意見や提案がたくさん提出されました。もし、もっと多くの人に聞けば、もっと効果的な提案が出てくるかもしれない。全国で飢餓問題の解決を求めて、積極的に実施して欲しいです。

このように最終報告会では、中間報告会での学びの深まりを経て、少女の主張の奥にある真意を自分たちはどのようにくみ取り、どう応えるのかという新たな問いのもと発表が行われた。このテーマの根底にある構造的な問題、消費と環境、そしてその背後にある世界経済の問題に至るまで目を向けていったグループも多くみられた。

また、異なる世代、異なる意見、異なる国など、異なる視点との出会いから新しい知が創造された。哲学的・倫理的などの異なるアプローチからも新たな知が創り出された。このように、最終報告会の授業は「知の創造の場」となっていたことが伺われる。

⑤ 最終授業の展開

最終授業の第 15 回には、後半のプロジェクト学習を例にしながら前半の講義内容を改めて振り返った。多くの受講生には、倫理的（ethical）消費、消費者市民社会、持続発展社会などの用語も単なる知識としてではなく未来社会の創り手である自分自身の生き方・在り方につながる価値として受け止められたことだろう。

最後に、授業者自身この半年間の素敵な学び合いに感謝していることを告げ、授業を締めくくった。

３.「知の創造の場」としての授業構築のために

本実践全体を振り返り、本時の最後に受講生が提出した『本授業全体を振り返って』や課題レポート（テーマ：『消費社会と私』のこれから）を引用しながら、「知の創造の場」としての授業の構築について考察したい。

前半の授業で行った貿易ゲームにおいても持ち前のリーダー的な素質を発揮し発展途上国チームの大逆転を成し遂げた J グループ Tm は、以下のように記述している。

> **普段の生活では考えないようなこと、考えたとしてもぼんやりしたような思いをこの講義では深く考えさせられました。消費生活をテーマに挙げて議論する上で、命や倫理的なところまで考慮しなければならないとは思いませんでした。座学ではなく、グループディスカッションや報告・討論会に重きを置くこの授業は、特に私のような人間にとってはとても良い経験となり、他の講義でもこのような形式で授業をしてくれたら、と強く思いました。**

Tm が指摘するように、実際には、大学の授業においてこのような授業形態はまだまだ少数派である。筆者の行う他の授業でも類似の意見は多く出される。このような授業への要請は学生からも多く出されているのである。

但し、形態だけではなく、真の意味で学び合いの場を形成し授業を「知の創造の場」するためには、まずテーマの選考、中間報告会の在り方、受講生へのフィードバックなど、様々な授業者サイドの配慮が必要である。それによって、受講生自身が異なる価値との出会いによって成長し、授業は「知の創造の場」となるのである。以下、C グループ Tr の課題レポートには、その成長が明確に示されている。

> **中間報告会の時は自分の考えがまとまらずチームメンバーの考えに従っていました。しかし、他のチームの意見は自分の予測、考えを超越したものばかりですごく参考になりました。中でも“日本での贅沢は貧困地での命に代えられるものだろうか？”これはすごく印象的だと感じました。やはり、貧困地の立場に立たないと考え付かなかったものだったので、それだけに命の重みはもっと大きいものであると感じました。それからは自分自身の意見を言えるようになったので、皆の意見を参考に最終討論に向け考えをまとめていけました。最終報告会では、やはり他のグループと比べると調べた量が少ないかなと感じました。中間報告会と比べるとさらに色々な観点から主張するグループが増えていました。しかし、自分の意見を伝えられたことは自分の中でも大きなことだったのでとても新鮮な気持ちでした。**

他者から発せられた新しい価値との出会いによってモチベーションが高まり、自分自身の学びの深まりを実感し自信を持てるようになる、そうしてそれぞれの者が学び合うにふさわしい存在に成長し、さらに他者を認め合える、尊敬し合える関係を創っていく。Tr の成長はそのことを物語っている。

さて、そのような受講生の成長を一層促すために大切なこと、それを以下に示した C グループ Tn の記述から読み取ることができる。

> **グループワークを途中で投げ出してしまったので、単位は別にどんな風になっても構わないと思っています。（中略）それでもこの授業は大切だと思うので、また来年も受講生の方と学び合いを広げて欲しいと思います。ありがとうございました。**

もともとグループワーク等コミュニケーションの必要な授業形態に苦手意識を持つ Tn は、一般市民受講生の Mt さんとうまく関係性を保つことができなかった。途中で授業をリタイアしそうになりながらも何とか最後まで頑張った。「人間力」「コミュニケーション力」「協働」など、時代が求める能力ではあるが、そのような教育・社会に入れない者が多いのも事実である。ただ、そのような、Tn の記述の中に大きなヒントがあるように思われた。

Tn は、「受講生の方の」ではなく「受講生の方と」と表している。つまり Tn は、学び合い、知を創造したのは受講生だけでなく授業者もだったと認識しているのであろう。

授業という場において、学習者は、異なる価値をもった他者と出会い、学び、自分に自信を持てるようになっていく。その上でまた互いに尊重し合える者同士の学び合いがなされた時、その場は互いの小さな「知」がつながり合い、新たな「知」を生み出す「知の創造の場」となり得る。これは、そのような場に近付いたと思われる授業を振り返り考察することによって見えてきたことである。

本論は、大学共通教育の『消費社会と私』の授業を振り返り、考察を行った。知識注入ではなく学生が主体となって行うプロジェクト型授業の設定、その際のテーマ選定の重要性、学生が交流しやすい授業設計、学生への情報のフィードバックと共有、授業者やゲストティーチャーによる適切な助言など、いくつかの授業者側からのアプローチは見えてきた。但し、それらをマニュアル化して守ってもおそらくその授業は「知の創造の場」にならないだろう。なぜなら、授業者自身が学び手として、新たな知への探究をしていないからである。忘れてはならないのは、授業者もまた知の創造の担い手として受講生と相似形であるということであろう。

児童・生徒・学生らの主体的な学びへと教育改革が求められる時代、何より大切なことは、授業を受ける側もする側もともに学び手であり、知の探究者であることなのかもしれない。大学の授業改革、教養教育改革においても、同様なのではないだろうか。

註

(1) これらの取り組みについては、拙論「知の創造としての授業をめざして　～授業改革へ向けての一提案～」（教師教育研究　第 3 巻（Vol. 3），217-224 頁，2010 年）や、松田淑子・山田志穂・吉村祐美・賈璐「大学院の授業における『学び合いの場』の創出とその意義」（福井大学教育地域科学部紀要　第 2 号，305-317 頁，2012 年）などを参照。

(2) ジャン・ボードリヤール，今村仁司・塚原史訳「消費社会の神話と構造」紀伊國屋書店，1995 年（原著は 1970 年刊行）

(3) 宇沢弘文「社会的共通資本」岩波新書，2000 年

参考文献

阿部治 監修、荻原彰 編著、2011、高等教育と ESD―持続可能な社会のための高等教育―、大学教育出版
池田香代子＋マガジンハウス、2008、世界がもし 100 人の村だったら　総集編、マガジンハウス
宇沢弘文、2000、社会的共通資本、岩波新書
内橋克人、2000、浪費なき成長、光文社
ジャン・ボードリヤール、1995、消費社会の神話と構造、紀伊國屋書店
セヴァン・カリス＝スズキ、2003、あなたが世界を変える日、学陽書房
日本国際飢饉対策機構 編、2003、世界と地球の困った現実、明石書店
平成 20 年版国民生活白書、2009、内閣府、社団法人時事画報社
松田淑子、2010、『知の創造としての授業をめざして　～授業改革へ向けての一提案～』教師教育研究、第 3 巻（Vol.3)、217-224 頁
松田淑子・山田志穂・吉村祐美・賈璐、2012、『大学院の授業における「学び合いの場」の創出とその意義』、福井大学教育地域科学部紀要、第 2 号、305-317 頁
レスター・ブラウン、2010、プラン B4.0―人類文明を救うために、ワールドウォッチジャパン
CEL98 号　特集：倫理的消費―持続可能な社会へのアクション、2012、大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所（CEL）
Erik Millstone、2009、食料の世界地図（第 2 版）、丸善株式会社